







祖の病曰 爰に湯なり 服に法ありきまに二一持  
 して天地より人を生さばくくくくくくくくくくくく  
 一幸乃成就に 報まにの 於てうりくくくくくくくく  
 万句りくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 席上とせしめくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 長程連綿きくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 先くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく





此面遠附む附の五新ありといふは  
お源ともおれは事なりとていふ梅  
河といふ本傳より言はれしは  
久遠より申すは梅原乃事といふ  
自然のお源なりとていふは  
求は清浄とていふは  
かきとていふは  
まゝに於て山に二龍ありて彼地の中

う海より一人の志といふは  
うり者なりとていふは  
名はとていふは  
字はとていふは  
と折るの風流は  
そはとていふは  
之物といふは  
唯うり者なりとていふは



ありぬきと社中よがしうき席きよと  
 和所高申居業古のじ子路し時明和成子  
 三三

寒英堂

波女心



未さゆ呵る外はとれいとん  
 三三 三三 三三 三三 三三  
 未さゆ呵る外はとれいとん

婆心

天府

蓼太

脇 其人の抄所附也呵る外は物いとん  
 三三 三三 三三 三三 三三  
 又るあらことゆき糸と呵る外は物いとん

第三 附ハ時音の一抄ト句法ハ枚取アリ  
 此等の衣約ハ存子名乗カトんハ而ト若クハ  
 三三 三三 三三 三三 三三



之々然と嘆くもや〜梅の如

栞門

夜も叔と歌者戸の目何と

詩女心

月の湧けと入江中流と

蕪草

暁 市原対し鄙味く立寄てき〜歌う〜教壇上

叔の頃もま里も古わ〜く〜ぬ梅もよる

夕暮の井も之が〜ぬ秋のさぬと〜場と〜定終る

き〜茶の〜は〜草摺の〜さ〜や

第三 対し風景の一勢ありて句は〜古山とあり

日何と〜有て〜ら〜の〜き〜湯と〜

月も〜る〜と〜万の〜江と〜後〜きの〜

月思ひ合

暮入やかると夜は寂〜

班象

母と〜〜〜梅と田楽

映我

さ〜り〜〜向か〜〜善〜の〜

蕪草

淵 対し人々場の子孫〜と〜は〜と〜

月何と〜ま〜り〜つ〜の〜女〜し〜母の〜答〜

嘆と〜わ〜る〜梅と〜亭主の〜傷〜

第三 対し面相の一勢〜〜句は〜枚形〜

ま〜る〜も〜の〜は〜〜〜と〜

其の情と〜

第三句面相三轉〜  
甘合ハ陽ニ添キル也即  
内容ハ折澤也服ニ事ハ  
タル也



名月也 漱々も干向る大井川

乳峰

替出よ何れ歌 築木の秋寒

枕鏡

高き家の葺き且ねと見遠く

蓼吉

勝 附き所音の歩原也 漱々も干向る

月影の意もまよふ川原の夕陽空さ  
くふくはまきく

弟之附 其人の一勢中を句法に去山し

築場の見送りも其何れくの暮らも  
惣鑑むを子もやらん

風雪が衣折ニカハルハ  
山ノ坊も風雪ノ手  
かこリ 技折 安田トアリ  
早山ノ坊ヲ見出ニナリ  
即其場ナリ故ニ場ハ  
しとリ也 場ノ山ノ坊ハ  
云ハズ 場ノ山ノ坊ニ  
思ヒナシテアハナリ 葺  
十月ハ里ノ十一月也 実  
ツニカタルカシヒリカ

風雪が衣折ニカハルハ

鯉半

小春き白く 葺き者十月

新釣

秋之の音 附ハ 八百屋、お給ぬい

蓼吉

附ハ 此音も 葺き場ハ 志し

衣折に紙子のつらぬ小春の空より  
葺き者の像も秋末のさき山場のさぬらん

弟之 附ハ 其人の一勢中を句法に去山し

葺き者も其何れかの寺張新と  
又く一勢し



物とく川うかぬ中の庭う那

祇考

思ふはまは詩樹と名トヤ

魚波

紅菊の好乃を井と沈む夕歌よ

藤吉

臨 附 其 場 其 人 の 歩 履 し 一 の 如 く 川 動 ぬ

何れを何とて本之志けりて聲よとて下  
寫れはまはくせんとは連符人の扇つむ右と歌  
思ふも又るあらし

第三 附 其 場 其 人 の 歩 履 し 一 の 如 く 川 動 ぬ

はまはくせんとは連符人の扇つむ右と歌  
思ふも又るあらし

詰感也 物有之  
時今ノ一轉ハ白面也  
内容ハ打語ニ寄リ

作 向 へ 申 へ ぬ り 麻 の 夢

梅人

都 一 願 余 系 の 秋 夕 塔

古喬

古 禪 志 摩 摩 の 今 月 片 月 決 して

夢吉

臨 其 人 の 歩 履 し 一 の 如 く 川 動 ぬ

發 志 摩 志 摩 志 摩 志 摩 志 摩 志 摩

第三 附 其 場 其 人 の 歩 履 し 一 の 如 く 川 動 ぬ

志 摩 志 摩 志 摩 志 摩 志 摩 志 摩 志 摩  
以 名 と して 其 句 の 核 心 と して

前句一転ハ一夜泊り都近  
ト見テ其思ハテ所入名ハ通  
キ所ニ代用サテ申所ト人  
トニ誤カ一リニナツテ也

尤 付  
夏之夜の月口出語カ大分  
一掃アリある夕立の事  
(其同論)



根が流しと耳はちきれて落葉が

左馬

引手も氷も雪乃下せぬ

投葉

恍惚の跡は遺りて秋の物事て

蓼草

詠 其人の折原附し山登り耳も鳴る

あきふくつりしは引手も氷とて  
蕪とよとのつら山畑の夕暮しのうきは

第三 附 竹分の一折ありて句は松形こ

つら冬枯の折りて秋に交り小橋と空て  
秋のしづの俳句は曲案のおのほやまをむく

新緑の極々日低く野の草

白翅

照ふく折も月乃夕葉

西羊

吹すさむ秋夕樂の笛竹

蓼草

詠 附 竹分の折ありて秋の物事て

野の草の折りて地比なりて構えも折も  
うらむて折ありて秋夕樂の竹

第三 附 竹分の折ありて句は松形こ

秋夕樂の草まゝあきとてはらりて







汗も又何きよけむれまの筆

素棠

晒年湘かき紙石川まゝ

概勝

草鞋よ京葉肉乃羽織忌く

葵を

細 其物の折紙附し何も包よ冬暑の姿

阿きし市津の桑河原かよのまの噂も又後  
取さききぬか人余情の白砂の赤うしろき置あは

第三 附し其人の一勢しめて句は杖形こ

晒よ石川のまか能くやうはハ唯礼志  
京又物の盛なりん

く山秋の阿きよ飛來ま海の音

西羊

高よあゝふき樹の山越エ

破顔

乳と阿きよ入初の日のもきらして

葵を

根 其物のとよめ附し阿きよと來きと蒼時

遙よなまやるハ風情曲白くさめて涼しと  
息と穿しも亦し

第三 其人の一勢し句は杖形こか山

路の下り口かかあゝ高き物よ清き入初の日  
あま山へまゆりあは



夜中〜<sup>地上毛</sup>夜も秋の夜の月

標風

船らしきくよあ〜着すのり

山紫

地も海もを世角さ〜の〜あ

蕪を

編 時節のこゝろ付て夜の初のおもひも打まて  
身よ海に〜旅あや〜ぬ人ももろかき  
漕〜のり〜き海もや

第三 附ハ手物し句はハを山し隅田菟海  
あ〜りの岸は〜むよ芦間の竹のたき海  
す〜地も夜の〜らひ〜は味〜あ

陸奥の十首の北五首  
七首にリ局をわさせ  
三首にわかと信ん（神中抄）

勢もと重初ハ〜て帳やりか那

八十男

君と七首年 菰の源と森

可穂

畔そお瓜のさ〜るる垣中〜

蕪を

編 其人の打海し綿木ハ〜ちのく〜古の  
や〜と君と七首よ家〜三首よ森人〜よ昔  
手玉の名和と〜し厚情と合〜る

第三 附ハ手物の一勢〜〜句は格取  
三首七首の小む〜海ハ瓜小豆の勢と合  
あ〜〜る〜り



百姓よ秋を細くも枯野うら

吏仙

小春よ白くも松のかき編

留胤

清くもやき旅の目く後之程もれ

葵吉

編時苔の赤深し秋に細くもとりよる

小春よは時と何とせしう 余情の時也  
の夕日影ももるく

第三 附くも人の一軒し句は「古山」を言ひ

くや七並和様とめうてぬる安有の人前、僮僕  
歓迎稚子候門とつびよるもめしん

空のあぬ女乃罪や土用干

五明

昼森和と披すなま日

可具

いさうむよわくち暮の中絶く

葵吉

編 老人の赤深し二階物干の屋たも塞じ

昼森すまふ和もやうくもやうくこももめ  
何れも家何れもなきは

第三 附く句は「秋形」なりわくちの暮

いさうむを老のまはうれしん



編 法不尔戸の之何りぬ成をうる

雨孝

籬のあはれとて片まき月

素勇

一 古刀持も今人も新海取とて

貞吉

編 一人のあはれし初の花野——といふ  
後藤と足るるなり

第三 附 一人の——執りて句はを山し  
おと新枕のこゝろはよ出給ひ一人と足りて

童うほや志の汗、やあおとん

帰景

浪もろくぬ成の云 舟

對貞

遺 唐使うらふの名無惜ゆき舟

貞吉

編 一場のとも附こほきき——の浦ふと  
いふ白浪のあはれなり

第三 一人の——執りて句はハ山なり  
鯨魚のあはれとてきぬをう——もあはれ







木也〜や野と行人のよの晴〜

松明ニテ見ル

山史

顔志紅葉の松のよちる

仙衣

花きき〜氷魚の糸とま〜むよ

色立

蓑衣

編 主人の折扇しうふさび〜き折う先は  
行い〜ある人よと〜うの台松の紅葉と  
花を〜ら〜風よ〜骨折と見〜

第三 時名の一勢〜して句は〜青山こ

氷魚の貫り〜と〜して出は〜人とあ  
句と動〜して〜

行〜〜あきあぬも近〜夕か〜

西羊

町と裾野よ城のま〜

雨鹿

四 他〜〜村守袋〜〜休つきて

蓑衣

編 手物のと〜詞下カメ〜あ〜と〜と〜城と  
何〜ら〜い〜な〜か〜山〜ふ〜の〜ま〜ま〜の〜

第三 主人の一勢〜〜して句は〜青山り  
め〜ら〜〜ゆ〜く〜と〜並〜の〜人〜は〜



ハ初也地子のくく一尺の小ま箱

清光

日浅くら如嘉の家く

北市

約章の初もろうよえくく

貞吉

編 附とま場の歩源こいまおよまの配  
何れくまとのくくた屋の結る歌く

第三 三人の一新くくく句法ハ左山こ  
約章の序句くくまる論のくくくくは  
まの初もあ然情くくくく

林原よハ新の古もえくく照射く

晋兔

本よも草くくく下園も

晋成

碑の葉内もくくば寸墨留く

貞吉

編 附ハ何れくく峯と帯くく木草の  
何れくくくくは何れくくくく  
まんくくくくくくく

第三 三人の一新くくく句法ハ左山こ  
壺碑もと尋入る風流の羈若後



能取翠や西施、落し、各々音

素琴

蓮、とく、ゆる、蓮の、夕の、勢

松雨

け、門、よ、く、く、か、る、思、ぬ、時、も、か、し

冬、古

脇 附、の、風、景、水、の、お、原、に、花、匂、は、流、る、つ、く、花、趣、の

ち、く、く、と、落、る、と、西、施、の、あ、も、う、て、袖、浸、し、ぬ

又、ふ、し、て、蓮、の、花、と、花、の、形、容、と、補、し、ぬ、也、氏、の

日、照、新、粒、水、底、明、風、飄、香、袖、空、中、舉

第三 附、の、ま、物、し、て、匂、は、か、る、山、の、何、事、別、花、の

庭、粒、香、は、か、る、不、贅、け、く、し

横馬

志、く、菊、子、麝、香、も、よ、ふ、竹、如、う、柳

猫、名、江、隈、も、踏、ぬ、香、霜 志、席

蛤、も、玉、と、う、る、く、は、日、く、流、る、海 筑、を

脇 附、の、ま、物、し、て、匂、は、か、る、山、の、何、事、別、花、の

ち、く、く、と、落、る、と、西、施、の、あ、も、う、て、袖、浸、し、ぬ

又、ふ、し、て、蓮、の、花、と、花、の、形、容、と、補、し、ぬ、也、氏、の

第三 附、の、ま、物、し、て、匂、は、か、る、山、の、何、事、別、花、の

庭、粒、香、は、か、る、不、贅、け、く、し

竹若か苗月  
廿六日 竹若か苗月  
年十二 竹若か苗月



廻板のうも多きよ由流る

杜原

ちほりは米ふ多し朝か撻

八南居

もくしらぬ多きし何紙る園の戸よ

葵老

細所分の折係附し厨の水つふい生活

切らぬ多き紙巻るはち何しも何し寸氷も

照ふあやう

第三 附し何物の一折うして句ははき山し

細と函園の折多と又あして一番紙の

そ多きも中し

島くも流る熱海名月流る船

青寛

伊豆の山をきりて

網くくすくし鱈 危 丁

尺樹

脇島よそ林 古名 北 味 喉 多

葵老

細 何物の折係し何温系しは初島をく

く折る流る舟よハ益出るやうし一魚類よとある

承り流るくく折るは浴衣の袖やぬくく

第三 何人の一折うして句ははき山しおの折る

の名もあし一それた多折る折し一その七文字

そホハハ折るはくくぬ曲る折好むし一は折る



松のくさけりくたてま枯野の那

得壽

松のくさけりくたてま枯野の那

花口

親のう子如木地の藤藤子物いえて

草香

編 竹言のともみ対し喰さ山の藤叶ハ小毎

文ハ萱枯果く松ハか沈る露の月代ハ  
その雫さともさ也

第三 一人の一新うて句はハ松形ハ

温泉の名何れあうともえかハ

松息とやハ草ハ松の福ら沈る

祇三

酒ハ市側の人ハつマ月

故一

と松の福らく草紫ハ心さゆく

草香

編 竹言の草原ハ松句ハ松より上着の

凡情と述べた松の福ハ心さゆく国秀の方

何れ交つ人ハ指とれハあ句ハ

第三 竹ハ竹分竹言の一新ハ句はハ松形

松ハ己の松のまき句ハ心さゆくハ竹ハ

一葉の曙ハく松ハくつマハあ句ハ



下京一さうぬ日何くおしう終

美知

しう終あうがの連の連牛

鬼守

我う好のかうう斗わーい豊あ

豊あ

編 思字の打原してハ源口鞆口鞆

はき約命う馬本女の終も志う

第三 一人の一時あて句はさ山こ

やう一能さ由と後ようかして

發情心人し思せしちち教楨

父母

西と親きる茶乃戸水丹

慎車

汝等の初撲ふとはと暇撫ふ

蓼ち

編 其物の打原し發か一人は思せしちと

初しううよ世とわらひ推らハ彼西子おむて

うし初えやねと源の富士の茶心者ふとの

休よも思ひしん

第三 一人うて句はさ山こがる茶

美あうりけ訪い来まうん角力の思ひあふ

大劉の思し終る一しんか







水之痛ぬ紀多きちるる那

左幸

みくろく 芦もまのハキ地 然我

朝 伊 予 番 野 乃 何 多 別 えて 葵 左

根 凡 糸 の 折 ぬ し ハ キ 地 つ づ ぬ と の ハ キ 地 と

何 一 種 種 と 考 へ て 一 考 の あり と 思 へ  
二 句 の 公 句 中 子 益 何 と 一 考 へ ぬ 人

第三 附 人 句 以 右 山 し 芦 も ハ キ 地 と

何 多 一 考 考 能 化 の 趣 持 考 へ 一 考 考 一 考  
あ 一 考 一 考

重 如 峰 へ け て 多 一 考 岨 考 一 考

吐 船

麻 も 馬 田 も 山 一 考 の 路 葵 巴

芥 中 人 車 一 考 近 一 考 葵 左

根 天 相 の と 一 考 附 一 考 回 麻 畑 一 考 一 考 岨 の

一 考 一 考 一 考 一 考 一 考 一 考 一 考 一 考 一 考  
一 考 一 考 一 考 一 考 一 考 一 考 一 考 一 考 一 考

第 三 物 持 の 傍 し 句 以 右 一 考 一 考 一 考 一 考

何 一 考 の 考 一 考 一 考 一 考 一 考 一 考 一 考 一 考 一 考



了ふくの御看守了室西の京

呂竹

眠る榊 夕日暮きく

枕司

客まらして 塩を鮎鯛のうす振

巻書

糸 蝶の羽の多と中と閑寂とそくは  
まふ寺乃垂榊鮎も傾く日のぬれは  
見たり候なりお原し

第三 其人の一掃に夕日のうらふまを  
ゆり情と榊のうらまを庭の南の鯛のうら  
一塩のうらまをとりいし

眠るヲシヲリニ  
馬車ヲドカ  
ウス機が鮎色  
ヲシヲリニ  
附合ハ渡ニチヲシヲルキホツ  
ルニハコノ榊カニ者ヲ兼用トナルト  
同レ也 手ハハコノ榊セトシ一ツ

さき〜 室乃ハ此の下〜

素室

つかせ〜 里 早苗娘

鍾山

小原屋下 榊森の客と片とて

巻書

脇 物産の歩原し下野の室のや〜 霞の夕煙  
さうあのだしはふせやくかりはふせい魚の子の巻  
訓をとりや〜 今も鱸はけり〜

第ニ 室の〜 勢し回之のい〜 此中の  
か〜 縁ハ心知ぬ客なり

ツナシ 鮎 サハ  
又ハコノ榊







紫物花也 未子何れうとある音

都雁

蘇垣と新く入梅乃夕時

風牛

あうらうと連 奇の鳥と梅さけて

蘇太

脇 紫物花也の言も何んとは花の形容

可れハ外も梅もまゝと干阿一ぬ蘇垣の俄照と  
是と家お海やう

第三 峴我を秦かとの隠を尋りて

三人の一新くして句法に於て

竹画く障子の隈や梅花月

馬老

炯 酒子梅さけあけの秋

一葉

あうらうと連 奇の鳥と梅さけて

蘇太

脇 あらぬ蘇垣の言も何んとは花の形容

可れハ外も梅もまゝと干阿一ぬ蘇垣の俄照と  
是と家お海やう

第三 其人の一新くして句法に於て

出船はうらうと梅さけあけの秋



洛中一掃 秋の夜

奇峰

時雨と物まの 濡れたる月

耳得

あまのこころ ちかきとあまのこころ

夏太

陽 昨昔月の物凄きおろし 諸行無常と

朝 空に霞を 煩悩の賊も 西のつと 弥陀老の 正人の 松珠を ちかきと 相傘も

折原のつと

茅三 其人の 一掃 句は 秋形と 茶花の

先雨のち水はくちん 葉の日

露石

燈と ちかきと ちかきと

東坡

川紙のち葉たし ちかきと

暮を

陽 時分の ちかきと ちかきと ちかきと

押切のちかきと ちかきと ちかきと ちかきと

茅三 句は ちかきと ちかきと ちかきと

時文のちかきと ちかきと ちかきと







梅、色とた子、傑く言名か

五凉

是等好もよこす時、の味解

透解

物、も如、鱈、もきむ、の、近、よて

蓼、古

脇 神、十、均、る、梅、も、も、志、ま、と、の、山、海、も

よ、あ、つ、く、ま、る、く、く、し、も、是、等、好、す、意、方

系、の、凡、情、と、ま、人、の、お、深、こ

第三 句法、松形、附、ま、人、し、中、入、り、の

為、松、を、袋、も、は、至、松、形、る、物、好、の、近、近、也

可ん

春、夜、と、買、は、く、る、牡丹、の、家

蝶、羅

小、瓶、を、夏、乃、山、と、編、息

亀、章

朽、ち、後、も、亦、盆、を、馬、下、り、也

葵、太

編 一、刻、子、金、如、夜、も、買、は、く、る、と、の、お、中、也

さ、う、く、ま、る、此、花、の、葉、も、ま、て、山、と、小、瓶、よ

可、存、後、い、の、さ、ぬ、ま、人、の、お、深、し

第三 富士の山、梅の山、む、ま、も、形、を、好、情、か

つ、く、ま、る、句、法、を、山、附、ま、人



源さく波の末裔之井水権

夢由

秋中を以て瀬田の夕照

葵磨

ふもも不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>能<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>多<sup>レ</sup>

葵右

脇 山寺比叡の夕光流れていれはといふやと五

直して流の花ちるも好屋まこと花瀬田の

佳景とて兼附といふ

針所

第三 其人の一行句はさき山し幸しくの

より下りを一騎高千のまよふや

風牙

楊きく川や施水の丸木

系くはくはくまき日 西羊

出代のまよ色辞やぬ名といふ 葵太

脇 時若の折扇し教らくは山川の花の影は

かゝりし人のけりやちるまき山寺の楊子

好景のまよ色辞やぬ名といふ

第三 其人の一行句はさき山し其家の庭り名

まよ色辞やぬ名といふ



君まゝさへ古條殿のぬかりの如

田國

志し軒渡るや魚の月

石賢

やぬるう如 然此く名とかりうて

真太

編 煙徒く一燈の浦さむくさどぬかりの

いぬきく之葉にその軒のきくて名とかりうて  
つる花のさうは子浅月乾くとやまきれし  
切のあはれし

第三附い人句はかき山 新の夕魚の志願くと田舎

くくくくひの人のけきりふめと又出くくく  
よのつくく棒葉術の指南とけりひやする

月らるく手もつうて踊る那

習蘇

輪の種ぢくも枝ありく

葵舟

飄くく赤松の駒如旅情く

葵太

眼 <sup>三月月</sup> ことわ附く月らくは尋常の盆踊りあつて

初月の山くくくくや地阿くくを幸奈りれし  
やあまのおあり

第三附い人句はかき山と春夜や夜夕らりし  
世の中よく地家あー地くくとくくく

世の中よく地家あー地くくとくくく



羽之く神ふ松と志つる也輝の舟

梧泉

船より舟をさし入る山川

春雨

象戯盤朽しき如書し然法て

葵太

編 拙ともの札入る松を乾て死ぬるし世も死ん

有しとて写し居るはと新積船の水はゆるる  
は情と物の折編

第三 其人句は「吉山」がさんとの序あきて

かふきりふきいこれのさぬこ

法をひしと人と又るん冬を月

眠我

市乃さる水の橋よりとね

白翅

堀紙より琴の松の橋かよハセり

蓼太

編 秋とるる水は柱男の心のはりさしとるの

若と氷きる新は人とや恨くさは冷しとるの  
きとるる昨をとやする水は市人あてり向  
くは橋上のまねとあまらり所分の折編

第三 其物の一折句は「吉山」寒響古の

琴とるるかして



乾

くはる香の根深も萩の葉の如

天府

妹の架寒も鷺の如く繪襖

蓼太

さゆく雪細江も年如波もそ

婆心

脇 其場の如く

第三の語の一語句は「さゆく」

おのゝこ妹の如く口けそ冬の夜に何風定し雪の如く  
上下の句は其風情と云ふべし其中心を知らざる  
出で実より第三の本意と云ふべし



少歌日平解てくあや細代さ

婆心

誓さくく娘ふ雪の紫舟

蓼太

折ふく川誰わてささよ娘くく舞

柙門

脇 鈴日山のきくく細代の業もさく鹿

ふく漕舟舟火とささ雪の所女の  
打原

第三 登句編すすくく細ひくく付

舟中さくく物所くと目付付一替  
うねくく句はくくさく

踊とは女房もさくくぬ白髪は

桃鏡

月の端名の森酒之秋

蓼太

桐落る月井此系さくくよ

友鷗

脇 其人の歩原内はか初歌の親仁も

か歌たりさきハ都の初秋か人女房の  
うくく開新深の一息

第三 幸場の一替句はくく山く釣瓶代

系さくくくくくくくく新涼誰か  
さくく







夕の原や森よ来り蝶も去れぬ

太喬

門を飯喰 夏も狭 延

夢多

見遠ふ之 眺 ぬり乃 望みて

西羊

脇 言 切のお原 夫はくき妻ハ二布物

飯櫃をまじり夕暮のやうけりも羨し

第三 都の馬家よ何せ都一息子の男成

又せしやと手うけし 望み原より主人の

一語句はハ枚取

ハ 幸 ぶとく 菊の都と 歌よき

投茶

新 海のい 法と 市よりして

魯太

先子 清河せよ 月報の 活も

八十男

編 お原 梅梅と 志きぬりも 一々 菊花の

比と 成る家と 此 秘花も 寫貴の 都よと

歸來 得問 菜萸女 今日 登高 醉幾人

第三 時分の一 轉何と なく 附とて

空 境ともい くら 味ひ 志る

白紙 伊也凡



素と河や海の果日如限まて

西羊

都千のそと松よ門松

藤を

誰家の離子御らん東屋中

文母

編

この海附海の果日乃取と茶園と観  
ふれと修ふふとつてを修うまると行きて  
都よのこと松りむるうかきとて思ひよせて

第三 玉場の一勢句はかき山し誰家の

玉笛と晴よ夜と飛すももるともや

玉如緒と細い若かり架座の亭

是物

引板の森是の在常迅速

藤を

二千里如飛高よ舟と見く

五明

編 時分は打添ぬしてくお秋の森是よ

吹おく家き聲猿あつ杯よ

第三 其人の一勢句はかき山兼感て奇よ

たろくや旅の共よもから此ひて南山寄

秋の初の日



うおして見くも夏野の薄るか

蓬戸

松の下井水とあけらんこせ

真太

遠路へ倦ぬ目鏡の志とて

雨孝

揚 折ぬとよもふぬ中巻は

此松陰よやくとてふも

第三 三人の一語ありのぢきとての  
名もどかしくとてゆい句は枚飛

脱 うえく夏海とみ給給の那

枕醉

後 も晴る屏月 朔日

夢吉

玉 毎午藤魚かさこ紙あて文く

山史

揚 附 此名 登句時やういふ人

あふらんき神し鏡とむむと家<sup>カニセ</sup>歌と恨る  
きくあひ画眉とあはれとあすは

第三 遠村の一語句法を山おの上下と

習情と電やうれをなは共なけり信も  
朝の可れは情やうい

迎附



吹可事く大り新く月の子多し

破顔

船くつふ事よ納金し冬く水

真木

小熱の似今ぬ指く骨折る

標風

喘 三場の女海細引の身くくも海よ

吹らりりふ土総下総の衛つて心人ちも  
事も松もくく

第三 其人の一轉句は松楓楓作匠の

今風も目ち女市代の首くぬま

連もら新花く付骨も面ふく

山紫

ま庭 再日の心くくら飄筆

葵を

くふ 駒く海に靴味くく

帰景

編 くやけ春も色香此外くくぬまは

此と木心くくさんとは之紅の法の時製と也

け春句の記者身まきくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくく

第三 其人の一轉句は山 厩別者此冬情子

約くくくくくくくくくくくくくくく



川は舟扇と花也新生會

可總

月すく登り輝の輝聲

真左

折石の干葉子如紅葉の如

吏仙

編 時分の折扇扇と輝と原一也

新生川の夕葉輝の如く信女の筆  
すきと橋より

第三 主人の一新句はさし

おと強者と見えし物かまぬまふ  
おのむらさき

暁もそく至ぬ清世の鳴子ふ

雷荒

人手の如く新田の林

真左

〜 暁もそく〜 ぬ月の山の端よ

西羊

編 ともあ附家よ鳴子の機引むきむとふ

おとこは信玄實僧初もいささぬ新田の小家  
おのむらさきいささとも云外

第三 時分の一新句はさし 芝庵のいさ

おのむらさきいささとも云外

下



子孫の志願一法一之くさぐさ

可貞

或く優よぬるむ此の所彼

真

手くくくくくくくくくく

巴水

編 土物の所所まわつてくくは滑勢の

た中まよる及橋お後しと鱈や小魚も  
春千就るやん

第三 其人の一勢向はを山いさ手與よと

穂かくく菜飯おさまけらる亭坊也

辨の所おの以法く海ひぬ小紫垣

素勇

名所合の存明る母

真

中ふく書 祐とぬるの秋り

巴陵

編 月さといわくは何も此花も催るは

やうく徳原おとさる所原のまじり  
きれおの年の葉のゆきも思出て時分は

第三 其人の一勢向はを山いさ日の若と

ゆくの若くかゆ







心面とて是れ志後言田植ふ

野菊

心面とて是れ志後言田植ふ

野菊

系掛一系也と尻一揮可也

蕙栗

脇 町名の抄原 白ふ物の口をさうと野山の

青ととら外とる 祭句なれきた  
少月白の町名もやいと合ふもの

第三 其人の一轉句は枚形 旅籠屋の

縁先は馬をさして九合羽の不九と  
町の肥ふ人よこと

むきとて決て音ねと系様

仙衣

築地 牛飼ふ牛 眠るやう

蕙栗

葦一原の帯のかう可う決て

槿馬

編 其物の抄原 祭句屋も此系と結とめ

とてやとて見えおとさす、女の句がたし  
さ決て牛飼舎人も打眠らと、附て、蝶や  
とては也

第三 其人の一轉句は山 爺句の番りうり

急りやき掃除の片情と付て、葦一原の帯の  
町の肥ふ人よこと



かた野よりかきぬ梅の白ひり

雨麻

何の雪間うら若菜披ん

真冬

雪鳥の後のたよりにも晴る

青寛

編 時管の赤麻梅のこかきぬ梅のこ

廣野の片情なれども雪の雪間梅初くと  
る後しる次めし

第三 毛人の一轉句は枚形若菜梅よと

お群るちま人のさぬおんきもハ織よ  
名うし晴の一まよ季よとてしる

入 松の濤や雪も真冬の

北市

冬如朝日の赤い花さ

真冬

玉の珠の南にまると捲りけて

梅人

編 時分ち赤麻を幸の真とての詞よま

雖時よりの雪の何れも松のひやま

まゆの紅の赤代さくとあひまぢりみちやふよ  
赤い花さ

第三 毛物の一轉句は枚形赤いまりし

まゆのねつさよをひ



初午やそらへぬ事ても梅柳

普成

百社ぬ、はく喜れ日くく

真左

高きくくく産み笑ふ家くみく

杜涼

編 時節のとら財を産くの梅柳くくく

くくくくもははくくく西も東も曲ふくく

第三 一人の一寸句は去山くく

く連くは胸けおもくく一

夢の秋日も原野く入く

松雨

風呂時は螺の寄く

真左

籠あは路都の味喰く

鯉才

編 ち切の折傘くく又年の具く

初くくくくくくくくくくく

第三 一人の一寸句は秋風小陣の赤味喰く

鯉の在まきくく







うらうら身始ふとあそぶの梅

尺樹

夕うらふ井の懸想ぬりて

夏老

東風よ五日乃雨やうらふ井

祇之

脇 其人の遠附 答句はふる佳人の深意もや

蘇垣は物見補理も奈らつゝふ佐か世  
爪情し同らうらう 取らぬれを幸のちりめの  
りつく 羨望もむらふ附の一神

第三 天相の一詩句片を山 五風十雨の時と

きくぬ妻の光とてまやをり

おし路や月ハぬらひとて栗

花口

ふつらうら初とまきけ去海

夏老

今山の堀まぬ石よ秋うたぬ

鏡平

脇 拍子の對附 さき初めはふと世はよとみ寺  
文子の隠居あまひは栗か嫁とて交りうらや

第三 夜もさかたと悦らふ山の倒口と

前句と見直しうら一詩句は松形



糸流きりつるうき物より胡蝶は

完車

朝印さき地よかきむすく流野

夏古

芥持くそ市提の厨幕うらて

左幸

編 時分の折原 古用り所外のは安

牙三 三物の一替 古き物説の傍りく

秋外集や汀子白ふ霜志松

子巾

庭燎子解る雪氷そく

夏古

と下尔所人志庵うあさうて

定高

編 時分の折原 汀子松は行吉の風情

雪氷とくくはようくは秋の文とさうくは  
雪氷とくくはようくは秋の文とさうくは

牙三 三人の一替句はき山

秋外集の型くくは是刻ね上下のま名もが



夏虫如灯とそくそく螢う那

故一

汗搗妻とく更るみしう夜

真冬

かきくはく 琵琶 琵琶の和室の寄迹と

湖堂

編 時音の折原 祭句 けりもかきねとの夜虫の

身よりわかれがわらひあつらふとよ守りまかす  
ゆるく編の心さ曇とよふ菟道とわらひしをて彼  
宵森とよすると祈り 結ひし 侍と梅と

第三 三物の一折句 けり松飛 夢高進の琵琶  
は吹よひさといひしも 琵琶の身近句 結と  
こころとよまきりし

此少海や控りしとわは枯庵花

黙我

小春とく移る野るちとく

真冬

正面より代官 編 名 相織るよ

真冬

編 三物の折原 千種百草もおとろへ庵花とよひ  
あめと結しと 廣野の約より情と海より小倉  
瀬谷の小春とも又とく

第三 其人の一折句 けりまか 牧士の携子

つらむとよ目の大将 歌とてあ



飛石し遠く乳母や文衣

西羊

蝶阿とく多敷牡丹一う杯

真古

清の身そくあふまの関とふし

吐船

物 三場の抄紙 遊の字に嬰子の志くしにほ

ふらんし家の風情のこ

第三 天相の一詩句はま山 舞舟の光此一玉

物りくもれて苦後洞も子とふくくア也なる

鮫汁や唇ハ大ふと化しと行

慎車

男すまゐの雪のそけし火

真古

町うゝハ都の多ふき〜決来く

美知

編 三場の抄紙 莊子列子の吾なをこハ

諸生ハ男信女くんふれと雪代のくハ油

徳利も傾けらる〜也

第三 三場の一詩句はま山 冬枯き〜ぬ

水の自中ハ都の一徳代〜



酒貫子来りねい若く一鉢に也

鬼守

そとく磔ちん門の松樂

琴太

舞ふくし川舟の喜や乾くらせ

班象

揚 土物の赤紙 極赤い川このやうにがらひしよ

杖舞えく子又六門 一休和尚

第三 天相の一轉句片き山物さうふき

市中うしとゆえんかまこいけいし

ちとせやうかゆまの琵琶の油

枕司

ちとせやうかゆまの琵琶の油

琴太

相傘よ眼薬かよの雪ちりて

蘭室

揚 土物の赤紙とこはる名幻狂のあふも

往迎く崩回拖の地ふれは若来る健も琵琶

かよと破の子をも杖写れ夢よとゆいん

第三 土人の一轉句片き山け日の臺滑ハ

今も湖南よ信流の人くがくし



二之天梅く高く春の月

蓼巴

梅よしの鐘のきうまじ定

蓼左

佳気叔と糸ふくくぬ清く渡りて

呂竹

脇 時分は春の月ハ戀くくると本名

ふもは此祭句とあして庭の一草のこ

第三 其人の一語句は山 夜半に庭の糸

たのりは若人し佳気叔はよきものなり

あつらひる手物

青柳やまじれと折枝もふく

風牛

牛 傍りく糸る春山紙

蓼太

高き尾山雛子の啼も青ぬ日小

魚波

脇 其人の物の折紙 手折と之の一句は情

牛 傍り人の鞭よとまきくいと嫩梅の美さ

手きくくるといといと

第三 時分の一語句は山 牛うりて糸と

之もいとぬ籠のきぬ句と梅て目もきけと

こくくくくく



傾城の枕時計よりけしう菊

眠江

新酒は淡き春はるめ

暮冬

ちよくも菊も柳も桐の葉も

露石

細 時分の打鐘はもれ聲はもたふすハ

新酒の破是れんと時音と合せし

第三卷の頁めとて系詞とて桐も柳も

ちよくも菊も柳も桐の葉も

後茅生や夕日ぬまゝ雉子も

耳得

初き此の夜む小野の一家

暮冬

物とぬ籠乃ち路の糸ゆよ

兀子

細 時分はもれ聲はもたふすハ

新酒の破是れんと時音と合せし

第三卷の頁めとて系詞とて桐も柳も

ちよくも菊も柳も桐の葉も

新酒の破是れんと時音と合せし

兀子



畔啼や衣柳に客乃かろき路也

魯磨

瓜吹子間と枕よりより

夢を

押対と端浴乃之荷進せく

都馬

編 其人の折原 今年異例<sup>テ</sup>腸先<sup>ツ</sup>断と

五十有餘の滯<sup>レ</sup>在<sup>ル</sup>日城<sup>ニ</sup>脱<sup>ス</sup>りて瓜  
の中<sup>ニ</sup>写<sup>シ</sup>て一<sup>ニ</sup>睡<sup>シ</sup>と細<sup>ク</sup>糸<sup>ノ</sup>力<sup>ヲ</sup>是<sup>レ</sup>もか

第三 其人の一句句は古山 幽京の風む久と

柔<sup>ク</sup>店<sup>ノ</sup>上<sup>ニ</sup>詩<sup>ノ</sup>文<sup>ノ</sup>人<sup>ト</sup>前<sup>ノ</sup>句<sup>ト</sup>又<sup>レ</sup>並<sup>シ</sup>て今<sup>ノ</sup>也<sup>ノ</sup>思<sup>ハ</sup>は  
る<sup>レ</sup>後<sup>ニ</sup>は<sup>レ</sup>むし<sup>ク</sup>古<sup>ノ</sup>前<sup>ノ</sup>も<sup>ノ</sup>思<sup>ハ</sup>は<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>情<sup>ノ</sup>こ

新しう終や行燈のしり流る折

鍾山

松間子寒ふ屏の小礎

魯太

猶まぬぬ名故子鏡まつせく

馬老

編 其物のと<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>時<sup>ニ</sup>行<sup>ク</sup>燈<sup>ノ</sup>一<sup>ツ</sup>降<sup>リ</sup>り<sup>と</sup>目<sup>ト</sup>よ

ま<sup>る</sup>ら<sup>ハ</sup>小<sup>ノ</sup>高<sup>ク</sup>踏<sup>キ</sup>進<sup>ム</sup>る<sup>り</sup>一<sup>ツ</sup>古<sup>ノ</sup>也<sup>ノ</sup>思<sup>ハ</sup>は<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>情<sup>ノ</sup>こ  
折原より

第三 其人の一句句は古山 白川の園越る

甲<sup>ノ</sup>は<sup>レ</sup>衣<sup>冠</sup>と<sup>レ</sup>き<sup>く</sup>き<sup>く</sup>と<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>古<sup>ノ</sup>の<sup>も</sup>も<sup>も</sup>け<sup>こ</sup>

瓦と添と

三つあつたらん  
不破の五月雨



秋の香をうきあらしむる花をうき

金鳧

月夜をくるといと本一本

冬太

はるの香をうきあらしむる花をうき

奇峰

揚 小葉の香をうきあらしむる花をうき

浦の香をうきあらしむる花をうき

第三 時香の一詩句は古山 新酒の香をうき

はるの香をうきあらしむる花をうき

菖入や 菖入 志賀子花の袖 一条

都 一と一葉の香をうきあらしむる花をうき

門の松 門の松 七と七の香をうきあらしむる花をうき

揚 三人の遠い所 何れも一と一葉の香をうきあらしむる花をうき

京 揚子昔の香をうきあらしむる花をうき

以所下れ 揚子昔の香をうきあらしむる花をうき

いふはと可ん

第三 時香の一詩句は古山 新酒の香をうき

都の叙式詞と見て初春此句は古山

南北詩話三句の福三三  
見上



原中や人も通るが秋の夕陽

東坡

月のうへに村の夕暮を

蘇太

六と一萬億の枕して

支廟

編 所を八百里のふく配りては人も足らぬ

月の出をうきうきと暮らすは

天相の抄

第三 明善の一語句は去山 二百十日のうへに村の

小傍の工まも枕の一子に解つて

名は去神の所もうへに

莞示

何ぞは去神の月を捉重

蘇太

借景と相違の好織り

子交

編 主人の抄所 切くは去神の出入の耳

さうはと一語一着は神工産子岷家と

果寂と補んとす

第三 其人の一語句は去山 去山冠者次冠者

大山八角かまはれとてかゝるまらぶむも



三日月如氷流る清きう那

唯我

夏や万妙な此黄令塘里

葵吉

なうしに瑤瑤理法まむ地者

鳳牙

編 其場の歩原 二月八日就と一斤の氷うと

疑うらの清冷波肅扇の令泉も何とせ

葉まし

芽之主人の一勢句法古山 令山の法る

いそ井はは松之結も古近江の傍りん

一 豫下志 蕪も明於何やう角

菊堂

惟子志々ぬ蓑乃まきら男

葵吉

飛不と居酒廊ふと栲之と也

梧泉

編 其人の歩原 沼の志蕪の水まきらて

何やうもろは刈らうす存もす二の二と降

くもは

芽之 主物の一勢句法枚形荷物々の船既をこの

は使とらぬも干あぬ為家のさぬあかん



傘さしをりふ汁も初しうけ

透翁

口初はくを松志新戸也

夢太

悠然と人驚るる時下りも

蝶羅

細 吟詠の折紙 癸句初冬の伊信と指すと

し詞は小よりのあまの十佳の船戸也と  
付し

第三 三場の一語句はを山 清松のそんりくハ

田畑しうりしを 唐崎 松原かとのさふも

りくふり

梅の香や女を神の法りり

龜章

胡蝶や色に神乃舞殿

夢太

並みき似大石 色を和るる

夢由

細 三場の折紙 梅の比類ひまふりも

やしはれハハ女の折紙

第三 三人の一語句はを山 蘇句を法句と

さふりれる舞女は法樂かしくも又あふり







茶の末如茶の落しや之を

青雨

橋もかたけの杯のま

夢太

観けいけいね能く著とて

習所

編 玄對 祭句黄の一字は春秋を金之て水と

居のまゝは此のまゝとまつて何と云ふと云ふの

於骨たしき流し白雲の二字は山は其のまゝ

お流るの

第三 其人の一語句は松風昔かゝる山極むとこ

孫て勢多れ昼餉も日やうたのしとぬ

ちゝゝも入まらまゝの柳の如

石髪

奇よみゝゝ意乃ゆまの

夢太

あぬらむまゝと連 木よ茶磨るゝ

舊因

編 其場のところ附力をもつて天地とくみんとつ

古の集の序文と編れて室の曙とお流して何と云ふと云ふ

此他者は集は暑さもいふ筆と執て力と合はれは巻軸と

かして聊其考むらふ予百餘章の編第三巻忽と

云ちゝゝと云ふ

第三 其人の一語句は山 橋名の人と云ふ



追加

刻しとや振うけ又流と高きしらと  
 掘りや縁や四五日古手 桶 信夫  
 敷くをぬよとと新や梨の花 白牛  
 船家乃婦うみ草とも木たし新 山人  
 伊鈴のとて流くやか人こ鳥 莎汀  
 高しとしら過るや梨まらと那 蓼旦  
 う久心すお水様ハ雪よと川言や 野牛

盗人乃来一き音たりほとととと  
 制北の角とと流とと 桶う那 浦舟  
 鈴子か歌女こも梨お好歌月 珪山  
 月乃流と舞月二日とほとと流 吐月  
 乞とととはたりとぬ新とととと月 蓼太  
 松の月は先一と流ととと山ととと 三甫  
 埋出やけいせいやととと更とととと 人左  
 似ととととととととととととととと 六窓



|   |  |
|---|--|
| 鶴の歌好屋う出うおき<br>塔の川明船う家野うか<br>一橋とく川う出歌我快<br>柳うやのう心うちハと取一う<br>海苔焼てはましくうゆる而歌<br>隈が池ハ月ハかきしし月言<br>古路もう之傍正坊子物思えん | 夢太<br>山朝<br>雷堂<br>阿音<br>盤古<br>周竹<br>乙児 |
|---|--|

一葉を名門近うき思乃うとこ  
 まうせとやうなうの何れ一頁を  
 書うてはたしてはわう百のねくあゆま  
 依う梓屏うちととあんととこ  
 いひあ一ふと葵子ハ再葉うも  
 あやまりおぬう心無うと  
 去う一門初心の一助とあきんいふ



かしとたり 亦光 毛席のあきひく  
 初くさくさふり 暮とたり 文と成  
 冬とたり 秋と成てん 毛ひく  
 いんさくハのさ 紫は 志り 夢と  
 くる人 くる人 くる人  
 夢と成り 一色



戸倉喜兵衛

雪門俳書目録

|                                 |                   |       |              |
|---------------------------------|-------------------|-------|--------------|
| 芭蕉翁句解                           | 蓼太述               | 曉花遺稿  | 吏流           |
| 白滝百韻                            | 機石集               | 前編花三解 | 如雷<br>夜光     |
| 鬚篋 <small>宗祇十五集</small>         | 蓼太解               | 續其袋   | 古嵐雪文集<br>蓼太撰 |
| 俳諧唐詩三物                          | 雪門社中              | 幸崎三吟  | 柳波<br>湖涼     |
| 蜀川夜話 <small>素坐宗哲庵紀并古今句拾</small> | 葛木撰               | 名乃宿   | 眠江<br>蕪太     |
| 六玉川哥仙                           | 如雷赤羽左衛門<br>南羅牛車夜光 | 僧都問答  | 雷堂           |
| 墨繪合                             |                   | 躑躅行脚  | 山奴集          |
| 魚と水                             | 古今婦女句拾<br>女野菴撰    |       |              |

目録



飛夜二款并登見賦 都雁撰

芭蕉翁七部搜 莫太撰

芭蕉翁句評入 去來湖東問答 桃鏡校

百後陽 馬老撰

續後陽 兀子撰

芙蓉文集 後陽 耳得撰

芭蕉翁文集 桃鏡

芭蕉翁附合集 桃鏡

新古三句のりり 桃鏡撰

花簞笥 正花論 白牛撰

五後陽 一具 周竹撰

梅乃後陽 皮 丸更撰

老耳集 崑田塚本 桃舟撰

恋乙見 莫太

俳諧無門閑 莫太撰

月下錄 花巻梅仙先生別出 後在名撰

百五十番句合 莫太 吐月

芭蕉翁文集且至圖 桃鏡

後編花三斛 如雷

凡羅画行 莫且

俳諧棚古八登句附合 氣暖

影名所句拾 我 萬古 莫太

附合百番句合 杜中

杞墨水 如風

芭蕉翁哥仙 春と秋 桃鏡

ち乙見 の乙見 外

糸山彦 六花菴選

虫勸進 六花菴門人 蛙音著

ひ後河女 も花夕集 か乙見 こ

芭蕉翁真跋集 莫太

芭蕉翁佛塚 同

養老八詠集 後河 麻介



かきみ男

遠州 芦毫

更級紀行

盤古

俳諧通夜物語

菜路  
弟鞋依書

因作

卷中秀逸 雪のはき

桃鏡

俳諧親仁

因作

續書これつむ

全

金平双身

因作

公羽  
其角  
出雪 三吟未來記

周作  
吐月  
信美

十牛圖

眠永

三編書の續

桃鏡

今書首

蓼太

多葉粉盒

盤古

十三条

全

水の音

志席

四編書の續

桃鏡

瓜の蔓

みみ

三ツ物集

蓼太

俳諧年八卦

志席

又編書の續

桃鏡

江戸返支

陸山



Blank page with faint horizontal lines and a red stamp at the bottom left.

大清宣統元年十月十四日

Table with 8 columns and 2 rows. The content is mostly illegible due to dark ink or damage.

|  |  |  |  |  |  |  |  |
|--|--|--|--|--|--|--|--|
|  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |

金



